パネルディスカッション

10月17日(土)

PM1:30〜5:00

我孫子市民会館第2・3会議室
（資料代500円）
主催：我孫子哲学研究会
☎82−7853（武田）

<生きる喜び>部分・ピカソ

〝ふつう〟の復権

本来、「学問・芸術」は「生活世界」の一部です。前者は後者に含まれるわけです。したがって、人間の生き方や社会の問題について考えるときは、〈専門的な知〉ではなく、〈ふつうの知〉にこそ意味があるのだと言えます。この「ふつう」ということの価値を明晰に自覚すると、人間の生は大きく変わる、私たちはそう考えています。以下は、『ふつうの復権』の背後にある考え方です。

古く明治の末、八十年ほど前に、夏目漱石は、「職業の専門分化が進めば進むほど人間は編する」「現代文明は、完全な人間を日に日に不完全者に打ち崩しつつ進む」「博士というものは、最も奇形な発達を遂げた者である」と、繰り返し力説しました。

規格品の大量生産を最も得意とするわが国は、漱石の言う歪んだ文明への道を一直線に邁進してきたようです。

この国をリードする学者や官僚は、幼いころよりペーパーテストの解法を様式化して覚える条件反射の訓練をつみ重ねた〈紋切型の知〉の所有者＝受験エリートにすぎません。これでは、生きた現実問題の解決などできるはずがありません。

しかし、私たちの多くは、この歪んだ学校秀才の持つ〈専門知〉に霊験あらたかな力を感じ、学者の権威に呪縛されているようです。しかも困ったことに、つい最近まで反権力の支柱となっていたマルクス主義の側では、これに輪をかけてより純粋に〈知〉による抑圧を行ってきました。

わが国の伝統的な様式主義的思考法（形の文化）とマルクス主義の唯物論は、共にはじめに「客観的正しさ」（こうあるべきだ）を置き、物事や人間のあり方に最適な規格や様式があると妄想しています。対立する左右両派は、その実、思考の深層においては全く同じ土俵にあるわけです。

「思い」が一切の出発点

人間が物（ロボット）でない限り、一人ひとりの心が抱く「思い」（関心・欲望）が一切の出発点になることは、原理上くつがえすことのできない事実です。

したがって、外側にある価値基準に自分が（または他人が）どれだけ合致しているかを見ようとするのは、逆立ちした発想でしかないのです。

本当の課題は、自分の「思い」（関心・欲望）をよく知り、それを吟味することです。「思い」の浮かぶ意識の水面の下を見つめることです。

この人間の関心・欲望・目的の共同性が、結果として客観とか正しさの〈像〉を作っているのであり、「正しさ」それ自体はどこにも存在しません。ここに「対話」＝「民主主義」が要請されるゆえんがあります。真理は、私たち一人ひとりの主観の相互性が作るのであり、予め決まっているものではないからです。

（文・武田　康弘）

パネラーからひと言

私塾主宰・40才
武田　康弘

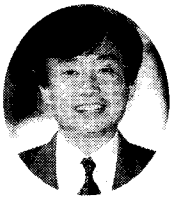
「教育の絶対の出発点は、子どもの〈思い〉を肯定すること。大人の理想への誘導は、魂の芯を破壊してしまう。外的な価値に囚われた情緒音痴の無表情をつくる。日本人が世界中で嫌われる深因は、一人ひとりから立ち昇る〈魅力〉のないことだ。」

明治学院大学教授・45才
竹田　青嗣

「現代における思想の最大の課題は、社会的な権力の源泉となった〈知〉によく対抗しうる武器としてこれを鍛え直すことだと思う。精緻な世界像を作る道具としてではなく、「社会」という巨大な〈知〉の建物を解読し、それを人間の**生活する場所**から疑い、判断するための技術として用いること。つまり権力としての〈知〉という**裸の王様**を見破る力として思想をあつかうことだ。」

日本オラクル社長・51才
佐野　力

「飼い慣らされた反省猿、商業主義の為に作られた美女、会社のためなら家族も顧みない社畜という名のサラリーマン、では哀しい。自由と活力と尊厳をもった**〈野生〉**的な個性を磨くことが最も美しい生き方ではないか。」



我孫子市議会議員・36才
福島　浩彦

「議員に政治をまかせている限り、市民のための政治は実現しない。ふつうの市民が身近な問題から、**直接政治に参加**していくことがカギだ。議員の役割は、市民の側に立った政策作りの専門家として、それを援助することだ。」